

くらしと協同をたずねて

おそなえ・おさがり・おすそわけ ～助け合いのユニークなかたち

御手洗 悠紀 (京都大学大学院農学研究科博士後期課程)

寒波が日本列島を襲うなか、愛知県春日井市林島町に位置する薬師山林昌寺に、地元の人びとが集まってくる。雪こそ降らなかったものの、冷たい風が吹き荒ぶ日に、大人 4 名・中学生 6 名が続々と集まって、副住職である野田芳樹氏を取り囲み、手始めに最近の楽しかったことや嬉しかったこと、悲しかったこと、辛かったことなどを報告しあう。彼・彼女らは、必ずしも檀家ではないという。一体これは、なんの集いなのだろうか。



図 1 林昌寺本堂内
出典：事務局撮影 (2023 年 1 月 25 日)

答えのヒントは、上の写真の奥に写っている「箱の山」にある。これから、この本堂内で、段ボールにお菓子やお米を詰めていくのである。これは、認定 NPO 法人おてらおやつクラブ (以下、おてらおやつクラブ) の活動の一コマだ。本稿では、賛同寺院の副住職であり、同法人の理事を務め

る野田氏のご協力のもと、林昌寺を事例にして「おてらおやつクラブ」のユニークな取り組みを紹介したい。

おてらおやつクラブの概要

同認定 NPO 法人は、その名の通り、「お寺」が担う、子どもの貧困問題に対する支援活動団体である。図 2 のように、檀家や地元の人びとから寺院に「おそなえ」された食品や日用品を「おさがり」として頂戴し、地域の支援団体を通じて、支援を必要とするひとり親家庭に「おすそわけ」する。従来、多くの寺院は檀家のための場であり、お供物は寺院内あるいは、行事で利用されてきた¹。しかし、おてらおやつクラブは、寺院および檀家の協力のもと、お供物を地域社会へと還元する仕組みを新たに構築した。

おてらおやつクラブの活動は、2013 年の大阪市母子餓死事件に衝撃を受けた、奈良県磯城郡田原本町の浄土宗安養寺の住職、松島靖朗氏が寺院にあるお供物を支援団体に持ち込んだことに端を発する。次第に地元の寺院を中心に活動は広まり、2023 年 3 月時点で、賛同寺院数は 1,851 であり、全国 47 都道府県に支援の輪が広がっている²。同活動は、「従来、寺院が地域社会で行ってきた営みを現代的な仕組みとしてデザインし直し、寺院の『ある』と社会の

『ない』を無理なくつなげる優れた取り組み』として、2018年度グッドデザイン大賞を受賞した。その際には、寺院が全国にひろがる「社会インフラ」である点も評価された³。宗派を越えた寺院ネットワークを活用しつつ、地域に根ざした支援活動を行なっているのが特徴であるといえよう。

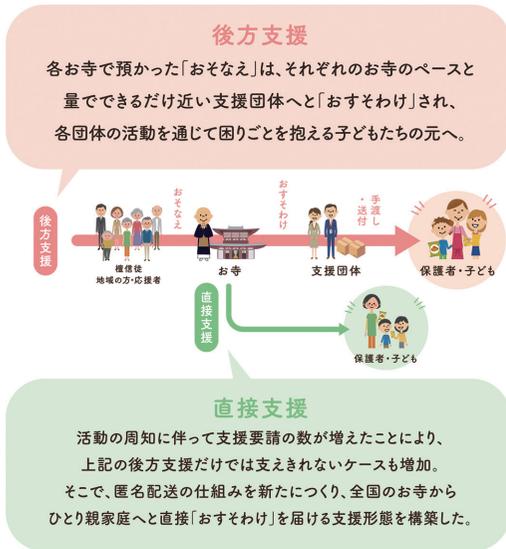


図2 支援活動の仕組み
出典：認定 NPO 法人おてらおやつクラブ提供

支援団体を介した後方支援が基幹事業であるが、適切な支援団体を紹介できない場合などに、家庭に直接配送する補助的な取り組みも行なっている。当初は個人情報の保護のために奈良の事務局のみで対応していたが、新型コロナウイルスの影響を受け、直接支援数がおよそ 20 倍以上に急増し、対応が困難になってしまった。そこで、新たに全国の寺院が地域の困窮家庭を直接支援するために、ヤマト運輸株式会社（以下、ヤマト運輸）と提携して「匿名配送システム」を開発した。このシステムにより、地域の各寺院と対象家庭間での個人情報をやりとりする必要はなくなり、事務局以外の寺院も直接支援を行うことが可能に

なった。

この匿名配送システムをヤマト運輸と協働して開発するきっかけとなったエピソードも興味深い。直接支援を拡充するために個人情報の問題を解決する方策を思案していたところ、偶然にも、奈良の事務局へ集荷に来るドライバーが、毎回の配送量が多い理由を聞いてきたのだ。そして、活動の内容を紹介すると、支援を申し出てくれたのだという。このように、様々な「ご縁」のなかで、着実に支援活動の輪を拡大しているのが、おてらおやつクラブという団体である。



図3 「おそなえ」の様子
出典：認定 NPO 法人おてらおやつクラブ提供



図4 「おすそわけ」の一例
出典：認定 NPO 法人おてらおやつクラブ提供

林昌寺とおてらおやつクラブ

さて、もう一度林昌寺の活動に話を戻そう。林昌寺がおてらおやつクラブの活動に加わったのは、2015 年のことであり、活動の早い段階から携わっていることになる。

同年 4 月に名古屋の修行寺での修行を終えた野田氏は、副住職として、住職を補佐する仕事に従事し始めた。そのなかに、お供物を貯蔵するための倉庫整理が含まれていた。言い換えれば、お盆やお彼岸に備えて倉庫の中を空けておく仕事である。それはつまり、賞味期限が切れてしまったお供物の食品を、自らの手で処分せざるを得ないということを意味した。

そのことに苦痛を感じた野田氏は、対策をインターネットで調べた結果として、「おてらおやつクラブ」の HP にたどり着く。そこで、ひとり親世帯を支援する団体を紹介してもらい、活動を開始した。

当初はまだ規模も小さく、月に一箱程度を一人で詰めていた。その後、「活動に興味がある人はぜひお手伝いください」と貼り紙を掲示したところ、それを見た一人の女性が寺院を訪れた。彼女は、檀家ではなく、野田氏と普段から交流があった訳でもなかった。林昌寺の近くに住む彼女は、地域コミュニティを活性化したいという意思を持っていた。有事の際に助け合うことはもちろんのこと、子育てをするなかで、子どもが多様な人びとと触れ合える場を作りたいという願いを抱いていたが、それを実現するための方法が分からなかった。その際に、相談した相手が、偶然にも林昌寺の檀家だったという。地域コミュニティを熟知しており、なおかつ面白い取り組みを始めた寺院として林昌寺を紹介された彼女は、自身の願いを実現する場として、おてらおやつクラブのボランティア活動を見出

す。その女性を中心に、友人や子どもたちを誘った結果として、本稿冒頭部に掲載した写真のような光景ができあがった。ボランティアとして参加するメンバーは毎回異なるが、たいていは友人や親子・親戚関係のなかで集まっているという。例えば、取材時に集まった子どもたちは、ボランティアの親に連れられる形で参加し始めた子が多いが、なかには親は用事で来られないため、友人と連れ合っで参加している子もいた。放課後に子どもたちが安心して過ごせる場の選択肢の一つに、林昌寺が組み込まれているといえよう。このことから、おてらおやつクラブのボランティア活動が、単に物資を梱包するものではなく、地域コミュニティと深く結びついていることが窺える。

「おそなえ」の意義

梱包作業を開始する前に、たくさんのお菓子が仏前に「おそなえ」され、お経が読み上げられた。これは、フードバンクやフードパントリーなど、他の生活困窮者を対象とする食支援事業ではおそらく、見られない光景ではないだろうか。野田氏も、「なぜ『おそなえ』という面倒なプロセスを踏むのか？」という問いをよく投げかけられるという。たしかに、寺院に寄贈されたものを、そのまま箱詰めしてしまえば、その分の時間を短縮することができ「効率的」であろう。しかし、このプロセスは、おてらおやつクラブの活動において重要な位置をしめていると言える。「おそなえ」とは、仏様やご先祖様に差し上げることだ。したがって、人の手から離れ、「仏様のおさがり」として、支援物資を送付することになる。これは、支援を受け取る側の人びとに

とって、重要な意味を持つ。

支援を受けた家庭の声を例として、紹介しよう。一つは「守られている感じがする」というものである。気持ちがこもっているものを受け取る時の温かみが、伝わってくるようである。もう一つは「おそなえものだから、安心して受け取れる」という声だ。行政や他の民間団体の支援を受け取る場合、それは「人から」受け取るものである。そうなると、「私がもらっていいのか」という罪悪感が生じうる。人目が気になったり、他者に迷惑をかけているのではないかという不安を感じたりすることは、時として援助を求めることを妨げる。支援活動を考える上で、考慮しなければならないことは、「助けて」という言葉をあげにくくする様々な要因である。それには、支援活動へのアクセス方法を知らないことはもちろんのこと、心理的な負担も挙げられる。このことから、「助け合い」は単なる物資の分配の問題ではないことが分かるのである。

「助け合い」の輪の中で

「おそなえ」の後、梱包作業が始まる。お菓子などの食品を賞味期限ごとに分類し、賞味期限の短いものから優先的に詰めていく。ただし、作業日から少なくとも2週間後以降のものでなければならない。今回の作業の場合は、家庭への直接配送が主であり、10箱の段ボールにそれぞれお米やお菓子を詰めていく。前述のようにヤマト運輸と提携している匿名配送であるため、お互いに顔を知ることはない。もう一箱は、近所の自立援助ホーム宛であり、これは野田氏が直接届けに行くものである。

お菓子が潰れないようお米を先に入れた

後、可能な限り多くのお菓子を詰めていく。隙間がなるべく空かないよう工夫しながら、熱心に詰めていく子どもたち。メッセージカードにもメッセージだけでなく、思い思いに絵を描いていく。このカードをお菓子の上に載せて、梱包作業は終わりとなる。



図5 梱包作業の様子
出典：事務局撮影（2023年1月25日）

以上、本稿で紹介したおてらおやつクラブの活動は大変ユニークであり、寺院以外の団体がそっくりそのまま真似をしたとしても、同様の成果を挙げることはできないだろう。しかし、それはこの活動から学ぶものはないことを意味しない。

例えば、「すでにあるもの」を活かすことである。野田氏が倉庫内の食品の活用方法をおてらおやつクラブに、ボランティアの女性が地域コミュニティ形成のための場を寺院に見出したように。自分の感情や願望に耳を傾けて、今までの「当たり前」を今一度疑ってみるといことも、大事なことなのかもしれない。野田氏は、元々あるものを活用することは、おてらおやつクラブが作り出した考え方ではなく、昔から日本の慣習としてあったものだ、と話す。そして、持続可能性が担保しやすく、始めるハードルが非常に低い方法であるとも言う。

もう一つは、人と人とのつながり、「ご縁」を大事にすることである。活動を拡大するために、こうしたつながりが重要であることは、いうまでもない。寺院は各地域の中で、地元の人びとの生活に携わってきた長い歴史を有しており、「社会インフラ」として地域に組み込まれている。そのため、同様の関係性を構築することは容易いことではない。それを寺院や僧侶が持つ基盤の強さと断じてしまうこともできるかもしれない。

ただし、ご縁を結ぶための積極的な働きかけを見逃すこともできないのである。おてらおやつクラブは、講演活動やフリーマガジン『てばなす』の発行、さらにホームページと様々な媒体を活用し、情報発信・共有に努めている。その際にはデザインはもちろんのこと、「誰に情報を届けるか」を意識して発信を行なうことを大事にしているという。例えば、困りごとを抱える人

びとが24時間365日いつでも声を上げられるようにするためには、年中無休で窓口があいていなければならない。その際には、電話窓口よりもインターネットの方が向いている。

また、同時に「誰かの力になりたい」という声の受け皿を用意する必要もある。そのためには、おてらおやつクラブの支援がどのように行われているか、仕組みだけでなく成果や関わった人々の想いも報告することで、支援の全体像を明確にして発信する。例えば、フリーマガジンの末尾には会計報告を掲載し、寄付金が適正に使用されているかを可視化することで、団体が健全に運営されていることを寄付者に伝えている。

おてらおやつクラブは2020年から、寄付者が税制優遇を受けられる認定NPO法人となった。公益性の高さや、財務管理の透明性が認められた団体として、ますます「助け合い」の活動の幅を広げている。

末尾ながら、取材に応じてくださった林昌寺副住職の野田芳樹様、ならびにボランティアの皆様へ感謝申し上げます。

- 1 「おてらおやつクラブはなぜ1600寺にも広がったか」『月刊住職』2021年10月号、567号、78-87頁。
- 2 認定NPO法人おてらおやつクラブ公式HP、<https://otera-oyatsu.club/> (2023年3月15日閲覧)。
- 3 おてらおやつクラブ公式HPへは下のQRコードから。

